HK

柏原兵三作品集 3

潮出版社

柏原兵三作品集　第三巻

昭和四十八年十月二十日　印刷
昭和四十八年十月二十五日　発行

著　者　柏原兵三
装幀者　栃折久美子
発行者　島津矩久
発行所　潮出版社
東京都新宿区南元町一四―一
電話　三三七―七二一　〒一六〇
振替　東京　六一〇四〇

印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　鈴木製本所

第三巻　目　次

殉　愛……7
短い夏……41
飛行機事故……71
スウィミング・プール……91
歯の話……103
挫　棺……115

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

独身者の憂鬱……133
母との旅……223
ある男の生涯……253
ミシシッピ河のほとり……285
解説　柏原文学の不可思議……山田智彦 295

柏原兵三作品集　第三巻

殉　愛

1

祖母の死後男やもめとなった祖父が長男である私の父のもとに身を寄せてから、祖父の家はしばらく空家となっていたが、私が大学院に入ったのを機会に、そこへ留守番として住み込むようになった。大学院には週二回行けばよかったから、私は留守番としてうってつけだった。

父母の家までは歩いて五百米となかったから、夕飯は家に帰って食べた。朝はパン食にして自分で用意した。昼は外出しない時は、蕎麦を取寄せた。母が時々掃除に来て、弁当を持って来たり、何か作ってくれることもあった。私は大抵、玄関の脇の応接間のソファーか、庭に面した縁側に置かれてある籐椅子に腰かけて本を読んで過した。

私は失恋していた。絵の好きだった私は高等学校で習った絵の先生の家に出入りをしていたが、いつしかその先生の独り娘にひそかに恋をしてしまったのだ。しかし私が大学の卒業論文に時間を取られ、その先生をしばらく訪ねなかった間に、従って彼女と逢えないでいた間に、彼女は見合をし、あっさり婚約していたのである。しかも私はそれを知らずに、大学院の試験に合格してからしばらくして、意を決して彼女を電話で誘い出し、彼女に結婚を申込んだのである。私は喜劇の主人公の役割を演じていたのだ。彼女は、私には好意を抱いていたが、今となっては婚約者を愛してしまっているから、といって私の結婚申込みを拒絶した。私は三日間迷った挙句、潔く身を引くことにした。そしてそれは失恋とは呼べないようなものだったかも知れないが、私は失恋の傷手に自分はしばらく耐えなくてはならない、と思っていた。そして私はその失恋から事実予想以上の打撃を受けていたのだ。そんな私にとって、祖父の家の留守番生活は、その打撃から静かに立直るために恰好の生活であるように思われた。

しかし最初の頃、私は屢々淋しさに耐え切れなくなった。そして時々高校生の頃陥った烈しい神経衰弱にまた陥るのではないかという不安に襲われさえした。――私は高校生の後半を蟻地獄のような神経衰弱に苦しめられた。その時私の心の慰めとなったのは絵を描くことだった。私が高校の絵の先生の家に出入りするようになったのも、この頃その先生が私の絵の才能を認めてくれたのがきっかけだった。一時期私は真剣に画家になろうと思ったこともあった。しかし結局私は自分の絵の才能に自信が持てずに、画家になるのを諦めた。小説を書きたいという希望が一方にあって、

その可能性の方が信じられたせいもあったが。

私はまた神経衰弱に陥ったら絵を描くことにしようと思い、長い間使わなかったために埃にまみれた絵の道具を運んで来たが、どうやらそれは無駄だったようだ。独居生活を始めて一カ月も経つと、また神経衰弱に陥るのではないかという不安に私はもはや襲われなくなってしまったからである。私はすっかり祖父の家の留守番生活に慣れてしまった。私はこの孤独な生活を愛していた。

私が神経衰弱の不安から解放された五月の初めに、祖父の家の二階だけを貸して欲しいという人が現われた。フランス人を妻に持つ画家で子供はいない。今住んでいる家を、家主の長男が結婚して住むために、五月一杯で明け渡さなければならないので、早急に家を捜しているのだという。その話を持って来たのは、その夫人の許で白百合の高等学校時代から今に至るまでフランス語を習っている文子という私の従姉であった。彼女は商社員と結婚し、一年後にはすでにパリに駐在している夫のあとを追って渡仏することになっていた。

祖父の家の二階は、関西に赴任した兄の一家が住んでいたので、一応独立した家の機能を備え、人に貸すにはいいようにできていた。台所もあったし、洗面所にはシャワーの設備もつけられていた。祖父は二階だけなら貸してもいいといった。死の間近なことを知っている祖父は、葬式は自分の家から出したいと願っていて、その家を全部貸すことには反対だったのである。兄に問い合せると、ここしばらくは帰任しないが、いずれ帰任する時に必ず出てもらえるのだったら貸してもいいといって来た。母は父の意向を確かめたのち、一応貸すことに決めた。母は前から二階を空けたままにしておくのは勿体ないと思っていたのである。

私は一人きりの生活を楽しんでいたから、たとえ生活はまったく別でも、誰かが二階に住むのは余り嬉しくなかった。しかし嘗て画家になりたいと思ったこともある私はその人の職業が画家だということに興味を覚えないでもなかった。そしてまた彼がフランス人を妻としていることに一種の好奇心を感じた。それは文学的好奇心といっていいものかも知れなかった。——私が蟻地獄のような神経衰弱に苦しんでいた時に、たびたび私を襲った自殺への衝動に負けないでいられたのは、いつか負をすべて正に換え、今私を神経衰弱に陥れている私の性格を活かして、何かすばらしい傑作をものしてやるぞという、至極文学青年的な自負心からだった。しかしいくら努力しても一向に私の目論む傑作は生れなかった。そして教養学部を終って専攻を決める時も、私は語学教師になれば食いはぐれることのないドイツ文学科を選んでいたのだ。この頃になると私を苦しめた神経衰弱は薄紙をはがすように直って行き、もはや私を苦しめなくなってはいたが、その代り私はすべてに対して気力を失い、精神的不毛に陥り、自分でも如何ともなしが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

たい状態に落込んでいた。私が高校の絵の先生の娘に求婚した時、私は生の高揚と生の充実を心の中に感じていたが、結果は先に書いた通りだった。私は相変らず小説を書きたいと欲していたが、何一つ書けないままでいた。そしてしばらくこの不毛な状態にじっと耐え、その状態に沈潜していようと思った。そんな風に生活している私に、この外人を妻にした画家の生活は、珍しく文学的好奇心を掻き立てた。もし同じ屋根の下に暮すことになったら、私は二人の生活を、ともかく、じっと観察してみようと思い立ったのである。

その日、約束の時間かっきりに、里見八郎という画家だけが現われた。彼は画家らしい、渋いが粋な服装をして玄関に立った。チョコレート色のベレー帽をかぶり、焦茶色のジャージの背広を着ていたが、その上着は普通の裁ち方と違っていて、胸の明きが狭く、ボタンが四つついていた。そのボタンはいぶし銀のような艶を見せていた。ネクタイはベージュ色の蔦縮染であった。靴は犢の皮のラフな感じの短靴だった。年齢は五十代と見受けられたが、頭髪は黒く、顔の色艶はよかった。鼈甲の眼鏡をかけていたが、その眼鏡の底には、落着いた、温和な光を湛えた瞳があった。瘍せていたが、背は高かった。五尺七寸位はあったろう。

一時間程前に来て待機していた母と私とが彼を迎えたが、二階を見せる前に、ひとまず応接間に通して、今まで文子の口を通じて間接的に聞いていた話を、彼の口から一応じかに聞いて確かめることになっていた。

話の聞き出し役にはもっぱら母があたった。社交に長けた母の聞き出し方はうまかった。私たちは、一時間ばかりの間に、彼の半生を聞き出していた。

彼は米沢の素封家の五男であった。中学を卒業すると画家を志して、私費でパリに留学した。パリには足かけ九年いた。最後の年に彼は現在の夫人であるパリ娘と知り合いになった。彼女はパリ近郊の大きな果樹園経営者の次女で、叔父の経営する画廊で働いていたのである。彼の親兄弟は猛烈に反対したが、彼女の両親や姉妹の理解もあって、彼は彼女との結婚に漕ぎつけた。支那事変が始まる少し前、彼は、妻を両親に紹介するために、一時のつもりで帰国したが、再度渡仏しようと思った時には、もうできないような状態になっていた。彼は千駄ヶ谷にアトリエのついた家を建ててもらって、そこに住んで、絵を描いて暮した。しかし太平洋戦争が始まると、外国人を妻に持っての東京の生活は不快なものになった。二人は、誰にも脅かされない生活を守るために、仏印に渡った。そこでならば、フランス人の妻を持った日本人の生活も、摩擦なしに営めたからである。彼は親類の伝手で、ある貿易会社に勤め、妻もまた、その会社の嘱託となって働いた。二人は二人の愛の生活を守り抜いたのである。現地で二人は終戦を迎え、リュックサック一つ背負って帰国した。千駄ヶ谷の家は焼け、二人は苦労を重ねた。里見八郎は止むを得ずブローカーを

して生活の糧を稼いだ。しかしそのうちに、妻はフランス語を教えることができるようになり、それを機に彼は元々向かないブローカー商売を止めて、再び画家としての生活に戻り、現在に至った。妻は、外語学院、フランス学園、W大学の講師をしている。彼は家に籠って画筆三昧の生活を送っている、というのであった。

彼の話し方は気持がよかった。彼の第一印象とまったく同じように、その話し方も落ちついていた。そして淡々としていて、静かで、品がよかった。

彼がフランス人である妻との愛の生活を守るために、敢然と決意して仏印へ渡ったという話は、私の母をいたく感動させたようであった。私は私で、あの荒々しい戦争のさなかに、そのような愛の生活を守り抜いた一組の夫婦がいたという事実に、やはり心を動かされていた。それはそれできっと随分勇気の要ることだったろう、と私は思った。

彼はそれから、今住んでいる家を出なくてはならない理由を述べたのち、もしこの二階を貸して頂けたならば、出なければならない時には、二カ月の予備期間さえ頂ければ、必ず代りの家を捜して出ることにするから、その点で御迷惑をおかけすることは絶対にない、尚もし私共についてお聞きになりたいことがあったら、もう五年も住んでいる今の家の持主にお聞きになって頂きたい、といって、家主の名前と電話番号を紙に書いて差出した。

「しかしお気に入って頂けますかどうか」と母がいった。

「洋間は十二畳の部屋が一間あるきりで、あとは完全に純日本風の造りなのでございますが——」

「私にはかえってその方が有難いのです」と里見八郎はいった。

「イヴォンヌは（そういって彼は妻の名前です、といい添えたのち）やはり洋風の家が好きなのですが、私は年と共に日本の畳の部屋がなつかしくなって参りましてね、イヴォンヌは教えに行っていて外に出ていることが多いものですから、不断はほとんど家にいる私の好みに合った家を今度は借りようといってくれているのです」

母はまた感動したようにいった。

「そうでございますか。——それでは御覧頂きましょうか」

母にたのまれて私も一緒に案内することにした。

玄関の間から通じている階段を昇って廊下を折れると、祖父の家の二階は一挙に展望が開けるようにできていた。高台にあり、しかも崖に面しているので、ずっとかなたまで見はるかせるのである。K植物園の森やE大学の煉瓦造りの古風な建物などがずっと向うにぼんやりとかすんで見えた。

「いい眺めですね」と里見八郎は感心したようにいった。

「ええ、天気のよい時は、あちらに富士山が見えるんでございますよ」と母がちょっと自慢げにいった。

その日はあいにく曇っていて富士山は見えなかった。

廊下は、八畳と十二畳の日本間の前を通り抜けて、奥の

十二畳の洋間に通じていた。その洋間は崖の上に突き出るように建っていたから、見晴らしはいっそういい。その洋間の下が、私が居間にあてている八畳の日本間だった。

廊下をゆっくり歩きながら、里見八郎は、

「この廊下は全然軋みませんね」といった。

「はっ？」と母がいうと、里見八郎はちょっとばつの悪そうな顔をしていった。

「いや、今借りている家は、戦後の安普請なものですから、廊下が軋みましてね。やはり戦前の本格的な建築の家は違いますね。震災前に建ったと承りましたが、一分の狂いも見せていない。いやこういう昔の建築の家に伺ったのは、実に二十年ぶりのことです」

そういって里見八郎は感慨深そうに、

「私の育った米沢の家も古い建築の家で、やはり総檜でしてね、その家のことをつい思い出してしまいました」といった。

廊下を渡り切って、私たちは洋間に入った。

「この家具や絨氈などもお借りできるのでしょうか」

「ええ、どうぞ」と母がいった。

「イヴォンヌはやはり洋間を好みまして」と里見八郎はいった。「こうした部屋が一つあると喜びます」

洋間には四畳程のヴェランダがついていた。

「このヴェランダは暖かくて、冬も煖房が要らない程でございます」と母が説明した。

私は兄夫婦が新婚当時、このヴェランダでよく朝食を仲睦まじく取っていたことを思い出した。私は、里見八郎もイヴォンヌとこのヴェランダで朝食を仲睦まじくとるような気がした。兄夫婦は子供ができてしまうと、もうこのヴェランダで朝食をとるのを止めてしまった。しかし里見夫妻には子供がないし、彼らの愛に満ち満ちた生活には、あたかも時間が堰止められているような、奇妙な無時間性が想像されたからである。

その洋間の手前は八畳の和室だった。

「子供たちはここを寝室に使っておりました」と母がいった。

その部屋の向うに洗面所と便所があった。

「あいにく湯槽がございませんで」と母はシャワーを示しながらいった。

「もし日本風のお風呂がお使いになりたかったら、下のお風呂をお使い下さい。但し石炭風呂ですので、手間がかかりますが」

里見八郎はしばらく考え込んでいたが、やがて、

「いいえ、わたしもシャワーで結構です」といって、

「イヴォンヌはとうとう日本の風呂に馴染むことができませんでした」とつけ加えた。

便所は腰掛式の水洗便所であった。フランス人だからビデが欲しいところかも知れない、と私は考えた。フランスのビデにまつわる様々な笑話を思い出しながら、何となく

そう思ったのである。

そこから廊下は右に折れ、台所と裏の段階と三畳の間があった。三畳間は、十二畳の座敷の副室で、中廊下を隔てて十二畳と向い合っていた。台所は、兄夫婦が結婚する時に、四畳半の洋間を改造して作ったものだった。張出窓を直した流しは幅が狭くていかにも不便だったが、ガス・レンジも、電気冷蔵庫も、瞬間湯沸器も、一応みんな揃っていた。

洋間を改造した台所だということは、里見八郎にもすぐ見て取れたようだった。

「この部屋は、ずい分いい木を使っていますね」と彼はいった。

母はその部屋の由来を説明し、食器棚は昔は書棚であったことなどを話した。

「煖房がよく効きそうですね」里見八郎はずっと先の冬のことをもう考えているかのようにそういった。

里見八郎は二階を見終ると、下の洋間でもう一度休んで行くことになった。

母がお茶を用意しに行った間、私が彼の相手を勤めた。

彼はみごとな艶を帯びた、黒色のパイプを取出し、鹿の皮の小袋からパイプ煙草をつまみ出して詰め、悠然とくゆらせ始めた。

彼は静かな口調で私のことを質問し、私がドイツ文学を専攻していることを告げると、いずれ留学するつもりか、と訊ねた。

私は修士課程を済まし、博士課程に進学するか、どこかの大学に就職するかして身の振り方が決ったら、留学生試験を受けてドイツかスイスへ行きたいと思っている旨を告げた。私はゴットフリート・ケラーの「緑のハインリヒ」について修士論文を書く予定でいたが、その後も引続きケラーについて研究する心ぐみでいた。

それから私は彼に絵について質問した。里見八郎は、どの会にも所属していない、といった。現在はもっぱら静物を描いているが、昔は人物画や風景画も好んで描いた、ということであった。

三十分程休んで里見八郎は立去った。立去る前に、イヴォンヌと相談した上、一両日中に確答させていただきたい、といった。

里見八郎は母にも私にも好印象を残した。

その日の夜、母は里見八郎からもらった電話番号をたよりに家主に電話をかけて、里見八郎の評判を聞いた。評判は上々であった。静かな夫婦で、家賃の支払いも確実で、家も大切にして住んでくれた、ということだった。

翌日の晩、里見八郎から、電話でぜひお借りしたいといって来た。そしてその週の土曜日に、正式に契約を取り交すことに話が決った。契約書はこちらで作っておくことになった。

土曜日の午後二時に里見夫妻が現われた。イヴォンヌは美しい人だった。色の白い、彫りの深い顔をしていた。髪の毛は金髪で、眼は本当に碧かった。背丈も里見八郎と同じ位あった。しかし痩せている里見八郎に比べて、胴廻りはその三倍もあろうかと思われる程、肥っていた。私はそんなイヴォンヌを見た途端、これでは廊下が軋むのも無理はない、と思った。もっとも両脚はすんなりと伸びていて美しかった。よくそんな脚で、その肥りに肥った胴体を支えていられたものだ、と感心する程だった。昔里見八郎が恋に陥った時、彼女はこのすんなりした脚にふさわしい肉体の持主だったのであろう。歳月の経過とともに、胴体が謀叛を起し、裏切ったのだ。この脚は彼女の青春の記念碑なのだ……

イヴォンヌは日本語が意外に下手だった。里見八郎との結婚生活は、もう三十年近く続いているはずなのに、下手だった。彼女は私たちの前で、礼儀から日本語だけで喋ろうと努めていたが、それでも時々うまくいえなくて、フランス語を喋ってしまった。

里見八郎のフランス語も私が予期したよりずっと下手であった。彼が契約書の大筋をフランス語で説明しているのを聞いていると、それが分った。私の判断では、里見八郎のフランス語は、イヴォンヌの日本語と五十歩百歩であった。

二人は思いのたけをどうやって表現し合うのだろうか、と私は考えた。夫婦というものは、言葉によらないでも、考えていることを通じ合えるのであろうか。ただ単に日常生活を共にすることによって、そして寝台を共にするだけで、それでもうすべてを通じ合え、不満を感じないですむのだろうか。たとえば肉の交わりを夫婦は心の交わりにまで高めて行くことができるのであろうか。しかしもともと人間は言葉によって完全に理解し合うことは不可能なのかも知れない。だから最初から言葉による理解の可能性に拒まれている二人は、お互いに相手の不可知を承認し合うことによって、その不可知の部分を含めて、相手を愛する知恵を学びとっているのかも知れない。所詮言葉によって理解し合えないのだという諦念が、二人の愛に、かえって安らぎと信頼を与えているのかも知れない、――そんなことを私は考えていた。

契約者は、私たちの予想を裏切って、里見八郎ではなかった。契約者の欄に、イヴォンヌが、ローマ字で自分の名前を記したからである。これはどうしたことだろう。その理由を問い質すのは憚られたが、家賃の支払者が里見八郎ではなくて、イヴォンヌだということを、それが意味しているのは明らかだった。きっと里見八郎の絵は売れないに違いなかった。そしてもしかすると里見八郎は、経済面では、一切をイヴォンヌに負っているのかも知れなかった。

「パパ、メイドさんのこと」とイヴォンヌが思い出したように里見八郎にいった。

イヴォンヌは最初から里見八郎のことを、パパ、パパと呼んでいた。そしてそう呼ばれることを、里見八郎は私たちの前で照れくさがっているようなところがあった。なぜなら里見八郎はそんな時に決してすぐ返事をしようとしなかったからである。

今も里見八郎は返事をしないまま、イヴォンヌに催促された件で母に向って語り出した。

「週に二回、通いのメイドさんが欲しいのですが、何か心あたりはおありではないでしょうか」

「私共にも、やはり週に二回手伝いに来てくれる人がいるのですが」と母がいった。「その人にたのんでみましょうか」

「どんな人でしょう」と里見八郎はいった。

「近所に住んでいる人なのですが、お姑さんが子供の面倒を見てくれるので、家計を助けるために、そんなアルバイトをしているのです。仕事をてきぱきしますし、よく気のつくいい人です」

「ではその人は奥さんなんですね」となぜか里見八郎は安心したようにいった。

それから里見八郎はフランス語でイヴォンヌにそのことを説明したのち、

「お願いいたします」といった。

「じゃあ、今日にでも確かめて、早速お電話で御連絡しましょう」と母がいった。

イヴォンヌは、パパが気に入ったのだからもう見ないでもいい、といっていたが、里見八郎と母に勧められて、二階を一通り見て行った。

彼女は十二畳の座敷に入ると、パパの生れた家にそっくりと大きな声でいって、日本に来たばかりの時、米沢にある里見八郎の生家を訪れて過した日々を思い出したらしく、その時の模様を母に、語って聞かせた。彼女は金箔の襖や、欄間の手の込んだ彫刻や、床の間を指して、みんな同じでした、といった。わたくし、その時きちんと坐ったら、足が痺れてしまって、立てなくなってしまいました。庭に大きな池があって、こんなに大きな鯉が泳いでいました。その家その時一回行ったきり、もう見ていません、と彼女は少し悲しげにその話を終えた。

イヴォンヌは約束でもあるらしく、しきりに時間を気にしていた。そして二階を一わたり見てしまうと、冷たいものでもという母の勧めを断わって、里見八郎と共に帰って行った。

村松圭子は、すでに子供が一人いたが、いつも身綺麗にしていて、どこかにまだ少女のような初々しさを残していた。彼女が私の家に来るようになったのは私が高校生の頃だったが、現在の彼女はその頃と較べて余り年をとっていないように見えた。新潟の生れで、北国の出身らしく、色

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.